

國學院大學學術情報リポジトリ

「ゴミ」のアクチュアリティ：
多和田葉子「捨てない女」を取り巻く社会状況

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-05-11 キーワード (Ja): 「ゴミ」, 再生, 3R, 価値の交換, アクチュアリティ, 「捨てない女」 キーワード (En): 作成者: 安西, 晋二 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000354

「ゴミ」のアクチュアリティ

—多和田葉子「捨てない女」を取り巻く社会状況—

安西晋二

I 教科書における「ゴミ」

「生活廃棄物処理法が改正されてから、わたしの生活も随分変わった」とは、多和田葉子「捨てない女」（「東京新聞」1999年11月27日）冒頭の一文である。作家である語り手「わたし」は、「書き損じた原稿用紙は束にして毎週月曜日に「もえるゴミ」として、近所のゴミ捨て場へ持っていけばよかった」ものの、処理法の改正にともない、「どんなに小さなゴミでも百グラム百円の処理費」が必要になると、その処分に躊躇するようになってしまう。ここでいう「ゴミ」が作家の書き損じた原稿用紙などの紙を主とする以上、捨てる／捨てないと問われるものはそこに書かれた文字（＝ことば）となる。「捨てない女」とは、ことばに対する作家の思いを語った物語だと、まずはいえるだろう。

この「捨てない女」は、2023年度発行の教科書『文学国語』（筑摩書房、2023年1月）や『精選 文学国語』（三省堂、2023年3月）に採用された。このうち、三省堂の『精選 文学国語』の『指導資料②』における「[単元設定のねらい]」では、「[捨てない女]は、物語の展開に沿って「わたし」の心情を理解するとともに、言葉遣いや表現の特色にも着目し、作品世界が現代に投げかけている問題について考える」と説かれている。「言葉遣いや表現の特色」には、作家である「わたし」によって意識された書く行為に関わる言説や、テキスト内に散見されることば遊び的な言説が相当しよう。『指導資料②』でもこれらについては、特に注意深く言及されている。『精選 文学国語』内の設問も、「わたし」の心情および小説内のことばに関するもので占められているように見える⁽¹⁾。したがって、「作品世界が現代に投げかけている問題」とは、小説を書く「わたし」の心情や「言葉遣いや表現の特色」が読者（生徒）に対してもたらす影響、あるいはことばと人との関係性といったところになると予想される。『指導資料②』では、ことばをめぐる「制度的なもの」⁽²⁾の意識と解体も示唆されていることに鑑みれば、やはり「言葉遣いや表現の特色」こそが、教科書的にはもっとも重視されるべき課題なのであろう。

ことばをめぐる「制度的なもの」の影響力は極めて大きいにも関わらず、日常的にはあまり自覚はされにくい。それを意識していくという読みは、「作品世界が現代に投げかけている問題」にもなるだろうし、「捨てない女」の学びのねらいとしても首肯できる。いかに小説が書かれているか（語られているか）を念頭に置いた読解は、「捨てない女」の授業展開例としてまったく異論はない。

一方、筑摩書房の教科書では、『現代文B』（2014年1月）以降、『現代文B 改訂版』（2018年1月）、『文学国語』と「捨てない女」は採録され続け、その指導書となる『学習指導の研究』では、授業の導入で現実的な意味での「ゴミ問題について考える」ことが一貫して挙げられている。『学習指導の研究』の「指導のポイント」でも、小説冒頭の「生活廃棄物処理法」の「改正」について「どのような法律か」が問われており、その解説として「ゴミの処理に対価が発生するという昨今の情勢を、より過激に突き進めたらこうなる、という想像が、この作品における想像力の過剰な成長の発端になっていることに留意したい」⁽³⁾とある。これも、『現代文B』から『文学国語』にいたるまで引き継がれており、筑摩書房の教科書では、現実的かつ一般的な社会通念上のごみ⁽⁴⁾が、「捨てない女」を読解するうえで強く意識されている。「ゴミの処理に対価が発生するという昨今の情勢」といった現実的な課題は、三省堂の『指導資料②』で述べられる「作品世界が現代に投げかけている問題」にも深く関わってこよう。むしろ、「ゴミの処理」のほうが現代的な問題として多くの生徒には実感されるかもしれない。

とはいえ、筑摩書房の教科書のような指導方針に対し、「社会問題等について考えさせるという有意義な面はある」が、「小説読解はまず本文の表現をしっかりと捉えることが肝要であって、小説を読んで何が考えられるかは次の段階ではないだろうか」⁽⁵⁾と疑問符が打たれるのも理解できる。国語の授業においては、まずは小説そのものをしっかりと精読すべきであろう。ただ、現在の授業では、生徒がタブレット端末やパソコン等で調べながら学習するという形態も広まりつつあり、`ことば、の`意味、は外部から容易く検索されても来る。筑摩書房の『文学国語』や三省堂の『精選 文学国語』などは、「捨てない女」冒頭の「生活廃棄物処理法」を「架空」と位置付けている⁽⁶⁾が、「廃棄物の処理及び清掃に関する法律」（略して廃棄物処理法）という日本の法律を即座に調べ、何をもって「架空」とするかを想像する読者（生徒）が現れないとは断言できないだろう。そこから、現実的なごみ処理における費用の問題に行き着くまで、さして時間はかかるまい。小説自体の精読を規制する要素が発生しやすい状況にあるならば、生徒に対して、まずは現実的なごみについて問い、小説内の「ゴミ」との差異や距離を意識させるといった筑摩書房の教科書のような授業展開例も不自然ではないだろう。ことばをめぐる「制度的なもの」に着目する三省堂の授業方針でも、こういった問いかけは重視されてよいはずだ。

国や地域（読者が属する自治体）によって、ごみおよびごみ処理が抱え込む実情には差異がある。そのため、そこから想像されてくる意味も変わってこよう。そして、ごみは、ことばに劣らず、誰にとってもあまりに身近な存在だ。だからこそ、現実的かつ一般的な社会通念上のごみおよびごみ処理を視野に入れつつ、「捨てない女」における「ゴミ」をめぐる言説を読むことにも意義がある。

II 「ゴミ」の時代背景

「捨てない女」の冒頭で「生活廃棄物処理法」の改正は、「ここ十年ゴミが増え過ぎて、税金だけでは処理費が賄えなくなってきたため、粗大ゴミだけでなく、どんなに小さなゴミでも百グラム百円の処理費を払って引き取ってもらうこと」になったとされている。先にも述べたように、日本の法律では「廃棄物の処理及び清掃に関する法律」という名称であり、「廃棄物処理法」と略され、「生活」の語は付かない。また、「生活廃棄物処理法」の改正は、「百グラム百円の処理費」という「ゴミ」の有料化である。当然、現在の日本国内では、一般家庭から出る「ゴミ」に「百グラム百円」という費用はかからない。名称および「ゴミ」に関わる費用の相違が、『精選 文学国語』などで「架空」とされる理由であろう。「架空」という認識には現実的な日本社会が前提になっている。もちろん、「百グラム百円の処理費」がかかるようになる法改正は、読者の現実から見れば確かに「架空」というほかない。だが、現実のごみ処理とそこにかかる距離があるかは軽視しがたい問題を孕む。

たとえば、小説の発表年である1999年から逆算した場合、「ゴミ」が増え過ぎたという「ここ十年」には1980年代後半からが該当する。1980年代後半といえば、日本国内ではバブル経済期となろう。人口も増えている時期であり、ごみも増えているのだが、大澤正明は、その背景には、焼却施設の不足と紙の消費量の急激な増加があるという⁽⁷⁾。国民ひとり当たりの紙の消費量は、図1⁽⁸⁾を見ればわかるように、1986年頃から1991年にかけて急上昇し、おおむね2000年頃をピークに2022年には上昇前と大差ない状態となっている。

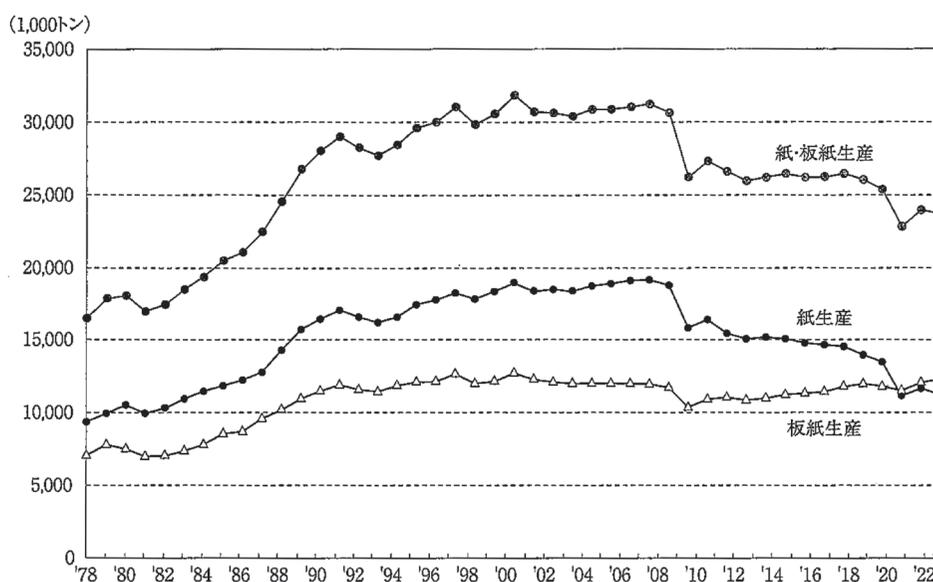


図1 紙・板紙生産量推移 (グラフ)

消費量に比例して、紙ごみの量も増える。小説内の「ここ十年」ということばは、こういった現実に対応していよう。しかし、デジタルメディア等の一般化にともない、紙の使用量自体が減少傾向にある現在の読者（生徒）は、「ここ十年ゴミが増え過ぎて」という一節のうちに、粗大ごみやプラスチックごみなどを想起したとしても、紙ごみまではなかなか想像しがたいのではないだろうか。時代背景に基づくギャップを無視して、「架空」の法改正という一言にまとめてしまっただけでは、やや乱暴なきらいもある。

また、清掃法が大きく改められる形で「廃棄物の処理及び清掃に関する法律」が制定されたのは1970年である。以来、現在にいたるまでこの法律はたびたび改正されてきた。社会および人々の生活の変化は、ごみ処理に結び付く。ゆえに、繰り返される改正は必然である。たとえば、東京都が初めて有料の半透明ごみ袋を導入したのは1993年だった⁽⁹⁾。半透明にともなうプライバシーの問題とともに、有料であったことも当時は都民の大きな反発を呼んだ。だが、いまとなっては有料のごみ袋が当たり前となっている自治体も多い。そもそも、「捨てない女」が発表される前から、粗大ごみだけではなく、その他の一般的な家庭ごみ（もやすごみ、など）も無料で処理されているわけではなかったのだ。一方で国内には家庭ごみを有料化していない自治体もあるが、現状は「百グラム百円」というような費用の高騰を見せていないだけだともいえる。プラスチックごみの削減を念頭において、スーパーマーケットやコンビニエンスストアなどのレジ袋が有料化されたことを思い起こしてみてもよい。無料（低額）であったものが有料化（高額化）される。そしてその反発が起こるといふ展開も、現実でたびたび目にしてきた光景である。筑摩書房の『学習指導の研究』で述べられていたように、「百グラム百円」は「昨今の情勢を、より過激に突き進めたらこうなる、という想像」ではある。しかし、現実のごみ処理で今後費用の増額が起こらないとは限らないだろう。たとえ、「百グラム百円」が「過激」な想像だとしても、やはりそれは現実的にもありうる可能性のひとつかもしれない。「捨てない女」に描かれた社会は、単なる「架空」の世界なのではなく、ごみ処理をめぐる、ありえた現在と、ありうる可能性のある未来としても読めるだろう。

「捨てない女」の冒頭部は、指導書や教材論において、「「もえるゴミ」という言い方が、捨てられる者の燃える情熱を表しているよう」だと語り、「「処理」という言葉が好きになれず、「ゴミとなって生命力を燃焼させ、火の玉となって死後も空中に漂い続けたい」という「わたし」の心情や言語感覚に焦点が当てられてきた。「わたし」の内面とともに、書くという行為やことばへの理解を深めていくうえでも、これらの記述は見落とせない。このあとに続けられる、小説を書くことに対する「わたし」の姿勢や心情にも関わる。同時に、作家である「わたし」は、「百グラム百円」の法改正以降、「もう気軽に小説の筋を変えることもできなくなってしまった」と語る。「もえるゴミ」に「捨てられる者の燃える情熱」を感じ取り、日常で繰り返される「処理」を「味気ない」と忌避する「わたし」は、自らが小説を書く過程で生じる書き損じ（＝「ゴミ」）に価値を見出していく。だが、それでも「百グラム百円は高い」とされるのである。「わたし」の想像力や小説を書く行為に、「ゴミ」

処理問題が付随してしまう。創作は、作家である「わたし」の生活を支える根幹でもある。したがって、「ゴミ」処理費用を高騰させる法改正は、「わたし」の生活を圧迫するものともなる。こういった事態は、小説発表年に基づく同時代状況のみならず、現在にいたるまでの、ごみ処理をめぐる社会状況を読者に想起させましょう。「捨てない女」の設定を「架空」とする背景、すなわち現実的なごみ処理問題が、読書行為にも重く押しかかってくるのである。

Ⅲ 「捨てない」＝「ゴミ」の削減

冒頭部に続く、形式段落第2段落では、小説を書く「わたし」の姿勢や心情が語られる。「短編をひとつ書く」にしても、「着想をメモ」し「図書館で調べ物」をすれば、「三十枚くらい紙を使ってしま」い、「ウォーミングアップに一作書く」と「それでまた三十枚ゴミが出る」と「わたし」はいう。さらに、「ひとつ予防作品を書」いて「また三十枚ゴミが出て」、「それから一気に本番を書く訳だが、それも一回目、二回目で、うまくいくことはまずない」とされる。小説の創作過程（あるいは創作方法）と、「ゴミ」を生み出すことは不可分であるといえる。この第2段落は、「それにしても百グラム百円は高い」という一文で始められている。よって、書く行為にともなうこういった「ゴミ」の創出は、費用が高いために「気軽に小説の筋を変えること」（「気軽に」捨てること）ができないという「わたし」の心情を示唆してもいよう。

「わたし」の創作方法とともに処理費の問題が前景化していく文脈のなかで、「一通の手紙といっしょに家具屋の大売り出しの広告も来る」「この広告紙一枚がもうゴミになる。そこでハサミを取り出して、椅子、テーブル、たんす、食器棚などの写真を切り抜いてみた」というエピソードが続けられている。展開としてはやや唐突な印象もあるが、同一段落の文脈で語られているのだから、小説の書き方も家具も広告紙も、「百グラム百円は高い」という状況といかに向き合うかといった問題で一貫していよう。やはり、高い処理費をどうするかが、「わたし」にとって喫緊の課題でもある。家具も「古くなれば粗大ゴミになり」、高額の処理費を払わざるを得なくなる。「わたし」は、広告の写真を切り抜いて「食卓の上に並べ」、「同じ広告の中からエプロン姿の女性をふたり切り抜く」ということまでする。ここで「わたし」は「ひとりで遊んでいてもつまらない」という理由から、「隣の川本さんの家の姉妹を呼び入れて」、一緒に遊び始める。広告の写真を切り抜き並べる行為は、ままごとのような遊びである。「これでゴミがオモチャになったとひそかに喜んでいた」とも語る「わたし」は、「処理」されるだけの「ゴミ」であった広告を、子どもたちと遊ぶ「オモチャ」へと再生した。「わたし」は、「ゴミ」を「減らす、工夫を凝らし、新たな資源として広告を再生利用、している。これは、いわばリデュースとリサイクルであろう。

日本国内では、「行政主導のごみ減量・リサイクルが本格的に展開するのは、バブル

経済崩壊後の1990年代に入ってから⁽¹⁰⁾となる。いわゆる3R (Reduce・Reuse・Recycle)の優先順位を導入した、循環型社会形成推進基本法が交付されたのは2000年である。原稿用紙や包装紙といった紙類が主な「ゴミ」の対象として語られる「捨てない女」に即していえば、段ボール箱や紙箱、紙製容器包装などのリサイクルを定める「容器包装に係る分別収集及び再商品化の促進等に関する法律」(容器包装リサイクル法)が制定され、完全施行にいたるのも1995年から2000年にかけてである⁽¹¹⁾。「捨てない女」発表年となる1999年までの「ここ十年」は、ごみ処理をめぐる問題がとりわけ大きく進展していく時期でもあった。現実的な法改正の是非はともかく、容器包装リサイクル法のほかにも相次いだ、個別的な「リサイクル法」の制定は1990年代の特徴でもあろう⁽¹²⁾。「わたし」の行為が「ゴミ」の削減を意図した、リデュースやリサイクルに類するものである以上、このような時代背景も看過はしがたい。高い処理費用と向き合わねばならない「わたし」は、小説の書き方とともに、いかにごみを削減するかという極めて現実的な課題をも語っていたと考えられるのである。

姉妹を迎えにきた母親の登場も、これと同様の文脈に位置付けられよう。この母親から「デパートの包み紙に包まれた枕くらいの大きさの箱を手渡された」とき、「わたし」は「しまった、と思ったが、もう遅い」と語る。賞味期限が迫った菓子は「ゴミ」寸前の物体にほかならず、「デパートの包み紙」を開けば、「和菓子屋の包み紙が顔を現し」、さらにはそのなかに「四角い缶」(「金属ゴミ」)までもがある。母親の行為を礼とは捉えられない「わたし」は、この「ゴミ」を「誰に押しつけようかと、ひそかにチャンスを狙っていたに違いない」と推断する。「ゴミ」である以上、処理費が生じる。それを避ける方法として、「わたし」は、菓子を食べて、「外側の二枚の包装紙を葉書きくらいの大きさに切り、その一枚一枚に文章を書くこと」を思いつく。そして、「わたし」は、「ひとつおせんべいを食べて小袋があいたら、そこに文章を書いた紙を一枚折って入れて、缶にもど」し、すべての小袋に文章を入れたあとは、「しけないようにシリカゲルを入れたまま缶のふたを閉めて、タイトルを貼り付け、出版社に持って行く。これはゴミではなく立派な小説なのだから、まさか受け取るのが嫌だとは言わないだろう」と、解決策を語るのである。

包装紙も、缶も(ついでにシリカゲルも)、「ゴミ」になるはずであったものは小説という新たな価値(資源)へとすべて再生される。「わたし」の思考は、広告から連続した「ゴミ」を削減するリサイクルのアイデアと読めるだろう。続く第3段落冒頭は、「ゴミを出すようでは小説家の屑。たまるのは着想、断片、記憶、ゴミ」と始められる。最初の「ゴミ」は、出せば「小説家の屑」になってしまう。しかし、「わたし」は、「処理」されるだけの「ゴミ」を出さない、あるいは出そうとしていない。「わたし」は「小説家の屑」ではないということになる。ふたつ目の「ゴミ」は「着想、断片、記憶」とともに「たまる」ものとして列記されている。こちらの「ゴミ」は、小説を書くうえで不可欠な価値(資源)として示されている。ひとつ目とふたつ目とで、同じ「ゴミ」という語であっても意味が大きく異なる。小説の創作が前提となっている文脈である以上、いずれの

「ゴミ」も、ことばや文字という語に置き換えられるかもしれない。しかし、「小説家の屑」を生み出してしまうひとつ目の「ゴミ」には「処理」以外の道はないだろう。それを避けようとする「わたし」は、「着想、断片、記憶」と並ぶ「ゴミ」へと価値を転換させているのである。第3段落は、そういった「わたし」の姿勢をよく表している。

ゴミを出すようでは小説家の屑。たまるのは着想、断片、記憶、ゴミ。たまったものにこそ価値がある。錆びたものを磨くのではなく、サビの美学を作り上げ、カビが生えたものについてはカビを華美に変え、汚れ、崩れ、埃をかぶり、酸化したものを集めて、世の中の顔を描き出す。

ことば遊び的な文章構成によって「わたし」は、「ゴミ」だけではなく、「錆び」「カビ」といった「処理」されるほかないであろう対象を、「サビ」「華美」と同音異義語を用いてみごとに価値転換をしている。しかも、一般的に社会で疎まれる「汚れ」「崩れ」「埃」「酸化」で「世の中の顔」（社会の中心・象徴）を描き出そうというのだから、「捨てない」ために新たな価値を生成していこうとする「わたし」の姿勢が、ここには鮮やかに示されている。「ゴミと言えば五味、舌の悟る五つの味覚、粗大ゴミの中には醍醐味という言葉が含まれている」と始められる第4段落も、同音異義語による意味の転換を表している。さらに「にんじんの皮」「ピーマンのへた」「じゃがいもの芽」「玉葱の皮」「かぼちゃの種子」「インゲンのすじ」といった本来であれば「処理」される「ゴミ」に対し、「色とりどりに花やげば、それをネガとして焼かれた写真の出来ばえもいいに違いない」と、新たな価値の可能性が模索される。「処理」という「味気ない」ふるまいから、いかに「ゴミ」を拾い上げ、価値や意義を与えて「捨てない」ようにするか、第3・4段落ではその柔軟な発想が語られている。「ゴミ」を中心に読むと、小説全体の構成はより明快になる。「わたし」は、「処理」せねばならない「ゴミ」を、異なる価値・意義をもつ存在として生まれ変わらせようとしているのである。

第5段落では、「小説を書く時に切り捨てられた文章ばかりを集めて、それを再編成するスターダストというプログラム」が紹介される。これも、ごみ削減の文脈に照らせば、再生利用そのものであろう。それにともない「わたし」は、友人からワープロによる創作を薦められるものの、「使ってみたが、うまく仕事はかどらない。ゴミが出ないと、物を考え続けることができない」という。データの作成／削除では、「わたし」は思うように小説が書けない。第2段落でも語られているように、「わたし」にとっては、小説を書くことと、(物質的な意味において)「ゴミ」を出すことはやはり分かちがたいのである。

「ゴミ」を出し、その「ゴミ」を価値あるもの(新たな資源)へと転換する。これが、「わたし」の創作方法でもある。ワープロを導入して「うまく仕事はかどらな」くなった「わたし」は、「ゴミの処理費が払えないので、これは法律違反だけれども、昨日、先週の書き損じを裏庭でこっそり燃やしてしまった」。廃棄物の野外焼却は現実的にも

禁止されている⁽¹³⁾。ただ、「わたし」の心情は、「法律違反」よりも、「焼かれた紙はあの世に行くという話」「死者があのお世でお金に困らないようにと、紙幣を燃やして届ける」という沖縄で行われる旧盆の風習（ウチカビ）に由来する。「死者たちは、わたしの書き損じた原稿を読んでいることになる。死者にはそんな失敗作は読んでもらいたくない」という思いが、「後味が悪かった」と「わたし」には感じられるようだ。「わたし」には不要となった「書き損じ」（「ゴミ」）が燃やされ、そのまま死者に読まれるという想像は、リユース（再利用）に近いイメージであろう。「法律違反」よりも死者（読者）を優先的に意識するため、「わたし」は「完成した本を一冊燃やして届けようか」とも語る。したがって、物質的な原稿用紙や本が焼かれてあの世へ行くという形質変化を経ても、自らの作品が他者に読まれること（リユースされること）を「わたし」は願っているのである。

「捨てない女」の最後の場面で「わたし」は、「草木染めをやっている友人」に教わった、「書き損じた原稿用紙を塩と酢を入れた湯の中で十五分ほど煮ていると文字が湯の中に溶け出して、原稿用紙はまた白くなる。それを壁に貼り付けて乾かせば、また使える」という方法を行う。原稿用紙のリユースであるのは明らかだ。そして、鍋のなかで原稿用紙を煮て、ひらがな、カタカナ、漢字が湯に浮かび上がり、それらを「おたまですくっては台所の窓から、ひょいと裏庭に捨てた」あとに、「くしゃくしゃになった文字たちは土の中へ沁み込んで消えていった。春が来て、ここに種子をまいたらどんな花が咲くだろう」と、「わたし」は想像をめぐらす。文字（ことば）が花（新たな生命）へと芽吹くイメージは、リサイクル（再生利用）の暗示といえよう⁽¹⁴⁾。価値を失ったものに新たな価値を与えるという行為は、「わたし」の創作方法でもあった。つまり、「捨てない女」は、同時代のごみをめぐる社会状況を背景としつつ、「ゴミ」の削減と小説の創作方法とが重ねられ、それらが比喩的に語られていく物語として読めるのである。

IV 「ゴミ」から教室の外を想像する

「ゴミ」の発生抑制や再生利用を繰り返し語ってきた「わたし」の背後には、廃棄物処理をめぐる時代および社会の趨勢が看取できる。確かに、国語の授業であればテキストの精読が必須だ。ただ、こういう小説においては、それを取り巻く社会状況へと目を向けることも軽視すべきではないだろう。

環境省が2022年3月に発表したデータによれば、「平成31年3月現在で、家庭系可燃ごみの有料化を実施している市町村（一部地域で有料化している市町村を含む、以下同じ）は、全市町村の63.5%⁽¹⁵⁾となる。年々、ごみの有料化を実施する市町村は増えてきている。とはいえ、当然そうではない地域もある。一方で、2003年に日本でいち早く「ゼロ・ウェイスト」⁽¹⁶⁾を宣言し、国内最多となる、ごみの45分別を行っている徳島県勝浦郡上勝町のような自治体もある。ごみに対する意識は地域ごとに異なる。昨今では「もえるごみ」ではなく、「もやすごみ」と表記する自治体も多い。読者にとって「もえるゴミ」

ということばさえ当たり前ではなくなってしまうえば、地域によって時代によって読みの格差は広がっていく。リサイクルなどの発想が浸透してきている 2023 年現在は、1990 年代に比べてごみの排出量自体が減少傾向にある。こういった現状をふまえれば、現実のごみ処理に関連する社会状況や歴史的展開を注釈していく問いかけは必然性を増していくだろう。

「捨てない女」の時代背景には、ごみ処理問題がリサイクルという概念へと進展していく社会状況があった。それは、2023 年現在に読まれる（さらにはその後も読まれていく）過程においても無視はできないだろう。むしろ、1999 年に比べて現在のほうが、「わたし」の行動原理をリユースやリサイクルとして実感しやすいはずだ。「ゼロ・ウェイスト」という考え方がより広まっていけば、現実のごみをめぐる社会状況と連動した再資源化を想起する読みもさらに優勢となるかもしれない。そうなれば、「わたし」のふるまいは無駄をなくそうとする経済的な姿勢として再評価できるようにもなろう。小説が発表された時代と、読まれる時代と、どちらの時代的社会的な背景も、「捨てない女」を読み開く鍵となる。「架空」の設定とはいえ、「捨てない女」は現実的な社会状況と非常に密接した物語世界となっているのである。

「架空」といえば、「小説を書く時に切り捨てられた文章ばかりを集めて、それを再編成するスターダストというプログラム」にもあらためて言及しておかねばならない。三省堂の『精選 文学国語』では、「スターダスト」に「架空のコンピュータ・プログラム」と注が付されている。このような機能をもつ「スターダスト」という名称のプログラムが現実流通していない以上、「架空」ではあろう。しかし、2023 年以降に「捨てない女」を読む読者（生徒）にとっては、必ずしも自らの現実に触れえないようなものではない。集積されたデータにも基づき自動で文章を作成する、ChatGPT などの生成 AI の登場は記憶に新しい。文章のみならず、さまざまなコンテンツの学習・生成を行う AI は、「スターダスト」以上の機能を有するテクノロジーである。現時点における生成 AI 自体の良し悪しやその文章の巧拙は置くとしても、現代の高校生であれば、実際に稼働しているそれらと「スターダスト」を重ねて理解するのも容易であろう。「捨てない女」が発表された 1999 年は、日本国内ではスマートフォンの流通も乏しく、インターネットが広まり始めて間もない時代である。現代とは、読者を取り巻くテクノロジーと社会状況が大きく異なる。図らずも、「捨てない女」には現実と連関するこういった未来像までもが描かれていたのだ。とはいえ、これは小説の発表年となる 1999 年を基準とした観点であり、技術的な側面に注視すれば、「スターダスト」はもはや「架空」ともいいがたい。「スターダスト」は現代のテクノロジーと近接する同時代性をも露わにしている。「百グラム百円」の処理費や「スターダスト」、3R を連想させる内容など、「ゴミ」を契機としたアクチュアルな言説編成は、「捨てない女」の根幹を成している。「捨てない女」において、小説の外側にある現実を読みの埒外に置き続けることは、ほとんど不可能なのではないだろうか。「捨てない女」を通じて、読者の生活と密着した現実がどのように小説と関わっているのか、読書空間の

外側へと向かう思考が問われるべきだとするゆえんである。

指導書や教材論ですでに論及されてきたように、「捨てない女」は、ことばに対する「わたし」の強い思いが語られた小説であろう。ことばをけっして手離そうとしない「わたし」の意志は、「わたし」自身の小説の方法を示唆している。ただ、ことばを再生し、再利用していく「わたし」の方法論が、リサイクルをはじめとした1990年代の現実的なごみ処理問題と連動している点も等閑視すべきではない。現実的なごみ処理問題をとおり見たとき、「捨てない女」には、ことばと「ゴミ」の価値を転換させ、再生、させようとする「わたし」の原理が浮上してくるのである。

社会状況とともに変化していくごみ問題と同じく、小説内の「ゴミ」をめぐる言説から喚起される意味も普遍ではない。「捨てない女」の読み方は時代および社会状況とともに変容していく可能性をもつ。「スターダスト」にしてもそうであろう。「捨てない女」の読解には、小説が発表された1990年代と読まれる現代と、それぞれの時代と社会状況に向けた眼差しが求められるべきである。なぜ、いま、「捨てない女」を教材として読むのかをより自覚していくためには、教室外へも視野を広げていく知識と想像力が不可欠だ。読者もまた、そこから「わたし」と同じく、捨てる、ための価値（資源）の転換（リユース・リデュース・リサイクル）が意識されてくるようになる。多和田葉子「捨てない女」は、ことばや事物を安易に不要と断じてしまう概念を排し、新たな価値と意義を再び獲得していくこととするアイデアにあふれた小説であるといえよう。

注

(1) 三省堂『精選 文学国語』の「捨てない女」に付された「課題A」は、次のような問いとなっている。

- 一 「わたしは『処理』という言葉が好きになれない」(174下・1)とあるが、それはなぜか。考えてみよう。
- 二 「短編をひとつ書くにも」(174下・2)とあるが、小説を書く過程でどのような「ゴミ」が出るのか、また「ゴミ」を出さないために「わたし」はどのような方法を思いついたか、それぞれ整理してみよう。
- 三 「わたし」は「小説の出来ばえ」をよくするためには何が必要だと考えているか。次の表現を手がかりに考えてみよう。
 - ・ゴミを出すようでは小説家の屑。(176下・14)
 - ・ゴミが出ないと、物を考え続けることができない。(177下・9)
- 四 「大きなカレー鍋に湯を煮え立たせて、……春が来て、ここに種子をまいたらどんな花が咲くのだろう」(178下・1～9)とあるが、ここには「わたし」のどのような思いが表れているか。話し合ってみよう。

また、「課題B」は、「捨てない女」では、言葉や文字そのものが小説の展開上重要なはたらきをしている。印象に残った表現を抜き出し、そのはたらきについて話し合ってみよう」という

ものであり、「単元設定のねらい」における「言葉遣いや表現の特色」を強く意識させるような問いとなっている。

- (2) 『指導資料②』の「作品をめぐる考察」では、「小説「捨てない女」は、小説を書く過程で生じるゴミ「書き損じ」をどうするかという極めて現実的な問題を巡って展開する」として、「制度的なもの」と「捨てない女」との関連性が次のように述べられている。

制度的なものの中で暮らしている私たち読者は（つまり言葉を伝達手段と見ることを習慣づけられている私たちは）、言葉の中に常に中心的なもの、意味や価値を求めている。それゆえそれら意味や価値の陰に隠れているものの声を聴くことはない。だからこそ、「捨てない女」の語り手（「わたし」）は、「中心的なもの」（作品）を覆い隠し、覆い隠すことによって、「中心的なもの」の陰に隠れている言葉の華やぎや鍋の中に溶け出す「文字たち」の賑やかなあり方を可視化するのである。

- (3) 引用は、筑摩書房『現代文B 学習指導の研究』（2014年1月）の清水良典「小説◎一 「捨てない女」多和田葉子」による。
- (4) 本稿では、「捨てない女」内の「ゴミ」と区別するため、現実的かつ一般的な社会通念上の「ごみ、についてはひらがなで表記する。
- (5) 井上明芳「多和田葉子「捨てない女」の構造的読解—断片の集積」（「國學院大學教育学研究室紀要」2020年2月）
- (6) 「生活廃棄物処理法」およびその「改正」については、『精選 文学国語』の「架空の法律」のほか、筑摩書房『現代文B』以降『文学国語』の『学習指導の研究』でも「架空の法律であるが」と「指導のポイント」で説かれ、筑摩書房『現代文B 改訂』を元とした、井上明芳「多和田葉子「捨てない女」の構造的読解—断片の集積」でも「指導書の指摘どおり、この改正は架空の設定である」とされている。
- (7) 大澤正明『教科書ではわからない ごみの戦後史』（文芸社、2020年3月）では、「高度経済成長期の10年間では1人1日あたり533グラムも増加しているのに対し、バブル経済期前後の10年間ではわずか139グラムしか増加していない」としつつも、この時期のごみの増加について次のように述べている。

高度経済成長期には、まだごみ焼却施設の整備が十分進んでいなかったもので、ごみが増えれば焼却施設を作ることによって対応すればいいというごく簡単な図式が成立していたし、当時はまだごみ焼却施設の建設に対する反対運動は深刻ではなかった。一方、バブル期にはごみ焼却施設の整備は一通り終了していたので、ごみが増えたので焼却施設をもう一つ作ろうという発想にはなりにくかったし、ごみ焼却施設建設に対する反対運動も激しくなっており、そろそろニンビー（NIMBY = Not in my backyard）という言葉も聞こえてくる頃になっていた。それ以上に困ったことは、バブル期にごみ焼却施設の建設費が高騰したことだ。[中略]

たかだか100グラム余であるにせよ、何故この時期、ごみが増えてしまったのだろうか。おそらく、紙の消費量が急激に増えたからだろう。

このように指摘する大澤は、紙の消費量の増加に関し、特に「宅配便の普及による段ボールの増加」「コピー機の普及」が影響しているとしている。

- (8) 図1は『古紙ハンドブック』（2023年7月）による。
- (9) 田口正己『ごみ社会学研究—私たちはごみ問題とどう向き合ってきたか？』（自治体研究社、2007年3月）所収「表5 「廃棄物処理法」制定以降の主要な廃棄物処理制度・ごみ政策」によれば、1993年11月に「東京区部「ごみ指定袋制」（ごみ有料制）を導入」となっている。
- (10) 小島紀徳・島田荘平・田村昌三・似田貝香門・寄本勝美編『ごみの百科事典』（丸善株式会社、2003年9月）

加えて、『ごみの百科事典』では1990年代前半のごみ減量・リサイクルのキャンペーン展開について次のようにまとめられている。

1992年の地球環境サミットを契機とした地球環境問題への関心の高まり、深刻化する廃棄物問題を背景に、1991年の廃棄物処理法の改正とリサイクル法の制定によって、行政主導のごみ減量・リサイクル事業の展開に弾みがついた。全国の各自治体は、“ノー包装運動”、“買物袋持参運動”、“3R（reduce・reuse・recycle）運動”、“ごみ10%減量運動”、“1人1日100g減量運動”、“三ない運動（ごみをつくらない、買わない、出さない）”などそれぞれに創意あるキャンペーンを展開するようになる。これらを背景に、1992年9月、厚生省、全国都市清掃会議の主導のもとで、ごみ減量・リサイクル運動を国民、事業者、行政が一体となって推進することを目的に“ごみ減量化推進国民会議”が設立され、さまざまなキャンペーンが全国規模で展開されるようになった。

- (11) 環境省「容器包装リサイクル法とは」（https://www.env.go.jp/recycle/yoki/a_1_recycle/index.html 2023年12月1日閲覧）には施行の経緯として、「政府は、平成7年（1995年）、「容器包装リサイクル法」（正式名称＝容器包装に係る分別収集及び再商品化の促進等に関する法律）を制定し、家庭から一般廃棄物として排出される容器包装廃棄物のリサイクルシステムを構築することにしました。この制度は、平成9年（1997年）に一部施行され、平成12年（2000年）に完全施行となりました」とある。
- (12) 田口正己『ごみ社会学研究—私たちはごみ問題とどう向き合ってきたか？』では、1990年代の個別的な「リサイクル法」の制定について次のように述べられている。

90年以降における「廃棄物処理法」改正の多さや、1991年の「リサイクル法」、1995年「容器包装リサイクル法」、1998年の「家電リサイクル法」、2000年の「食品リサイクル法」「建設リサイクル法」など個別「リサイクル法」の相次ぐ制定、同年10月の「循環型社会形成推進基本法」の制定が示すように、90年以降の廃棄物法制度は90年以前のシンプルな廃棄物法制度とは好対照である。

- (13) 『ごみの百科事典』によれば、「以前は、家庭用焼却炉でごみを燃やすことがあったが、ダイオキシン類が社会問題となったことから、自粛あるいは禁止されている。地面やドラム缶でごみを燃やす「野焼き」は、ダイオキシン類対策特別措置法により禁止されている」とある。ダイオキシン類対策特別措置法は、1999年7月成立・公布、2000年1月施行となる。また、「地方

行政」(2000年1月)の記事「野焼き、地域を問わず禁止 悪臭防止法改正し規制強化、罰則も検討—環境庁」には、ダイオキシン類や悪臭に端を発する野焼きの禁止は、「地方自治体では、広島県と宮崎県がそれぞれ九九年三月に公害防止条例を改正し、罰則規定を設けて県全域で野焼きを禁止した」とある。なお、その後は悪臭防止法ではなく、2000年9月の廃棄物処理法改正で廃棄物の野外焼却(野焼き)は禁止されるようになる。1980年代に表面化するダイオキシン問題をきっかけにして、1990年代にはごみを庭などで燃やすこと自体が、自粛・規制の方向に動いていくといえるだろう。

- (14) 筑摩書房の教科書『現代文B』の『学習指導の研究』では、「おたまですくっては台所の窓から、ひょいと裏庭に捨てた」以下の箇所、「豊かな味わいの源泉である生き物のイメージに、文字が変換され、さらに土の中でそれが養分としてリサイクルされていくことになる」「書き損じの文字たちが、まるで自然界の生命のリサイクルの一部に組み込まれたかのようなイメージに収斂していく」と、リサイクルのイメージを注解している。ただし、「捨てない女」では、この箇所だけでなく、随所に3Rがふまえられていると考えられる。
- (15) 環境省 環境再生・資源循環局 廃棄物適正処理推進課「一般廃棄物処理有料化の手引き」内「1-3. 有料化の導入状況」(2022年3月 https://www.env.go.jp/recycle/waste/tool_gwd3r/ps/psR403.pdf 2023年12月1日閲覧)
- (16) 寺本博美「第1章 地域社会のデザインとゼロ・ウェイストの経済学」(寺本博美編『循環型地域社会のデザインとゼロ・ウェイスト』和泉書院、2007年2月)では、「「無駄」をなくすことが、ゼロ・ウェイストの原点であり、「ごみゼロ」ではない」とされ、「ゼロ・ウェイストでは排出物を単純に不要物とするのではなく生物的循環および技術的循環のなかで生産物あるいは再生産物と考える」と説かれている。

※本稿における多和田葉子「捨てない女」の引用は、すべて多和田葉子『光とゼラチンのライブチヒ』(講談社、2000年8月)による。なお、引用に際し、ルビは省略した。

